

aria

2021

A MAGAZINE ALL ABOUT "TILES"

No. 03



Editor's Letter

現在の様な状況下で、ふとStill Lifeという言葉が思い浮かびます。時代の流れや1日の行動は過ぎ去り流れていきますが、いつも身のまわりにある食器や植物などの静物は静かに佇み、あるがままの姿が美しい。今一度日常に当たり前の様に存在する物に目を向けることで今の暮らしが少し豊かに感じられるかもしれません。久しぶりのaiuでは様々な立場から焼きものを扱う方々の多様な視点を探していきました。タイルも焼きものも静物だけど目には見えない奥行きと奥深さがある、そんなことをaiuを通して感じていただければ幸いです。

Interview

焼きものを手がけるアーティストを訪ねて Satoko Sai + Tomoko Kurahara

崔聡子さんと蔵原智子さんによる陶芸作家ユニット、Satoko Sai+Tomoko Kuraharaのアトリエは緩やかな空気が漂う東京の下町、亀戸エリアにあります。時折横を通りすぎる電車の音や、元運送会社の倉庫だったという空間に柔らかな響きわたります。一歩足を踏み入れると天井が高く開放感のある空間の中に電気窯や棚、素焼きの土や作品が静かに並んでいました。



「はじめは絵タイルに興味があったんです」

焼きものに触れるきっかけを尋ねると蔵原さんはそう言って、アトリエの奥からタイルにまつわる本をたくさん持ってきてくれました。高校生に出会った青一色で描かれたポルトガルの絵タイル、アズレージョ。街の中にこんな素敵なものがあるってすごく綺麗。とひとたび魅了され、やがて彼女を陶芸の世界へいざないます。「これを自分で作ってみたい」一方、崔さんは美大で元タプロダクトデザインを専攻して

いました。在学中に新しくできた陶芸学科の存在を知り、プロダクトよりも少し手で作れるものにしたという想いがきっかけとなり陶芸学科を受験、その後蔵原さんと出会います。その頃から今に至るまでタイルへの興味は尽きないのだそう。「やっぱり平面が好きなんですよね。タイルって工業製品だけど手仕事の良さや色、質感の違い、本当に古いものもあって。作品としてきちんと制作したことは少ないけれど興味はずっと残っています」

大量生産と一点もの間、中量生産がいい

大学の卒業制作で試みに転写を施したカップを制作したこともひとつのきっかけとなり、2006年より崔さんと蔵原さんは陶芸作家ユニットとして活動を始めます。風景写真を展示し、写真と同じ柄を上絵の具で4色分解しプリントしたカップを制作、写真とともに展示販売を行うところからスタートしました。1枚の写真でも切り取る部分によって見え方が全然異なります。ひとつひとつ



んです」

焼きものは、記憶を遺すメディアになる

風景を写真に収め、焼きものに転写するという活動はやがて2人にとってその後のライフワークになっていきます。写真は平面ですが、焼きものに転写することで立体になります。焼きもの

風景の一部を切り取って転写した器

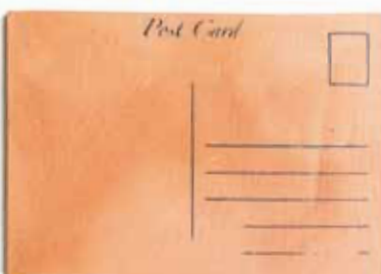
は表情が違いながら、同じ写真から生まれた作品はまとめて一つのシリーズとして扱われています。崔さんと蔵原さんがユニットを組んだ当初から目指してきたこと、それは大量生産でも一点ものでもなく手仕事でできる範囲のこと、中量生産をやりたいという想いでした。石膏型やシルクの転写など量産の技法は用いるもの

それを敢えて手で行うことで、自然と出るかすれや量産では表現できない微細な変化を生み出すことができます。全てが整った均質さを求めるのではなく手仕事を感じられる作品と目の届く範囲の量のバランスを大切にしています。「以前、ある陶器メーカーと製品開発をした経験があったのですが、カチッと綺麗にできすぎてしまっ。そこで自分たちには“揺らぎ”が必要なんだと改めて気付いたんです」

風景を写真に収め、焼きものに転写するという活動はやがて2人にとってその後のライフワークになっていきます。写真は平面ですが、焼きものに転写することで立体になります。焼きもの

のになると途端に様々な視点からその質感を眺めることができます。手触りや形も作品の一部となり、いわば触れるアルバムの様なものと崔さんは話します。転写というレイヤーを経て風景がぼんやりと

抽象的になり一見絵なのか何かよくわからない、でもよくみたら風景で絵としてもお皿としても機能する可能性が残されています。一般的に絵皿という「エッフェル塔」など特定の場所が描かれるキャッチーなデザインが多い中、パッと見るとどこかわからない誰かが見た風景が、手にした誰かのテーブルの上にある。「用途がよくわからない物でも見る人、使う人が想像できる余白を選んでいる」と崔さんと蔵原さんは話します。



陶器のポストカード



様々なデザインのタイルを制作し、包装紙として展開したデザイン



器も多く手がける崔さんと蔵原さん。「チェックと風景」というプロジェクトでは、世界の様々な国のポストカードから色を抽出し、チェック模様を絵付けしたお皿を制作しました。



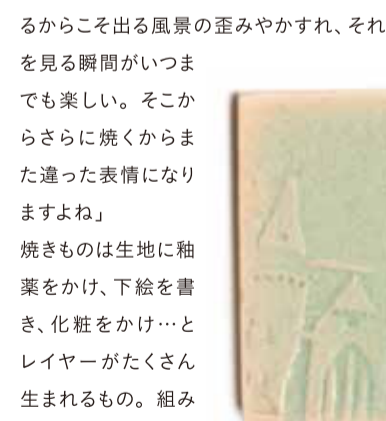
自分たちで全部決めず、融合性を楽しむ

縦軸に形容詞、横軸に場所や時間などを表し、色や線の細さなどを二人で話し合いながら決めていきます。それぞれのお皿の作品タイトルには興味深いストーリーが詰まっています。雪の朝のエディンバラのチェック。夜のサントペテルブルグのアパートのチェック。セントアイブスの小道レンガのチェック。それぞれのチェック柄は釉薬の重ねがけで描かれ、土と釉薬の相性や釉薬の面白さ、奥深さも同時に伝わります。器から惹かれる色や質感は人によって様々。また、焼き付けるという作業はオリジナルの原本だけでなく複製して遺せるということ。焼きものは壊れなければ永久的に遺ります。記憶を残すメディアとしての魅力も感じていると崔さんと蔵原さんは話します。

「すごく使いやすく機能的な器を作りたいというよりは、誰かの記憶のどこかに引っかかるものが作りたいんです」

東京 青山のセレクトショップ、スパイラルマーケットで2019年秋冬のシーズンテーマと包装紙をデザインした際は都市と都市の風景が交差するイメージを表現した多彩なタイルを制作し、それをもとに包装紙やディスプレイに展開されました。立体である焼きものが平面になり、元々が焼きものだからこそ平面になっても空間を感じることができ、グラフィックワークにも奥行きが生まれます。物質的には平べったいものだけに立体感がある。それはまるで風景に出会った瞬間や制作工程の時間軸やストーリーまでが凝縮されているように感じられます。

「もっと絵で何でも描ける人だったら、こんな複雑なことはしていないと思うんです。“刷る”という行為が飽きなくて。手でやるからこそ出る風景の歪みやかすれ、それを見る瞬間がいつまでも楽しい。そこからさらに焼くからまた違った表情になりますよね」



イメージができていからこそ純粋にそれぞれの工程を楽しみ、2人で活動を続けている意味があると崔さん、蔵原さんは話



ソースと釉薬の組み合わせで絵が仕上がるという創造性豊かなコラボレーションは、まさに食と焼きもの人と優しく繋いでいます。(現在はコロナ禍につき中止中)

焼きものを制作する際の様々な工程と人の記憶にある様々なレイヤーを交錯させる楽しさと奥深さを教えてくれた崔さんと蔵原さん。お話を通し、視覚化した物体(焼きもの)から伝わる情報以上に、



時間や歴史、都市の風景、人の記憶や感情など目に見えない要素がより一層色濃く浮かび上がりました。



Satoko Sai + Tomoko Kurahara

2002年、ともに多摩美術大学美術学部工芸学科陶専攻卒業。崔の韓国留学、蔵原のフィンランド留学を経て、2006年より東京のアトリエに拠点を置く。陶器を媒体に、風景・場所・記憶などをキーワードに、版画や写真などの要素を取り入れた表現を探究している。<http://www.saikurahara.com>



貫入

器やタイルに細かく入る美しいヒビの様な模様、これは“貫入”と呼ばれる技法です。貫入を発生させるためには、主に貫入釉という釉薬が用いられます。素地に貫入釉をかけ高温で焼いた後、窯から取り出す際の外気との急激な温度差で素地と釉薬が収縮します。その素地と釉薬の素材の収縮率に差が生じるため、貫入が生まれるのです。

一口に貫入といっても、荒い模様、細かい模様、灰を入れて貫入のラインを際立たせた模様などバリエーションは様々。職人が昔から伝わるレシピを基に釉薬に使用される水や顔料などを調合し、毎回原料の調整を行います。とはいえレシピだけで一筋縄に出せるものではありません。

焼きものは自然由来のもの。素地の土の種類や強さ、同じ配合であってもその日の気温や湿度など気候によっても大きく左右されます。さらに貫入釉は焼成時にほぼガラス質となるためとても繊細です。窯の温度が高すぎると“煮え”と呼ばれる現象（沸点を越え気泡ができる）の原因となったり割れが生じます。釉薬量も一般的な釉薬と比べて倍程度を塗布し厚みを持たせるため扱いが難しく、2倍3倍と作業工程がかかります。天候の影響や特性を理解しながら行う最終的な調整はまさに職人の勘や感性によって仕上げられます。

これらの工程を経てできる貫入はまさに自然由来の模様。同じ物を作っても一つとして同じ貫入は存在しません。美しく深い奥行きのある透明感、焼きものの本来の魅力をさらに引き出し、光を受け止め多彩な表情をみせます。焼きものや貫入は狙った通りのものが作れないからこそ唯一無二で奥深い世界。自然に寄り添い伝わってきた技術と現代の職人の感性を融合してきた焼きものにしかない美しい装飾。これこそが貫入の最大の魅力ではないでしょうか。

Clackle

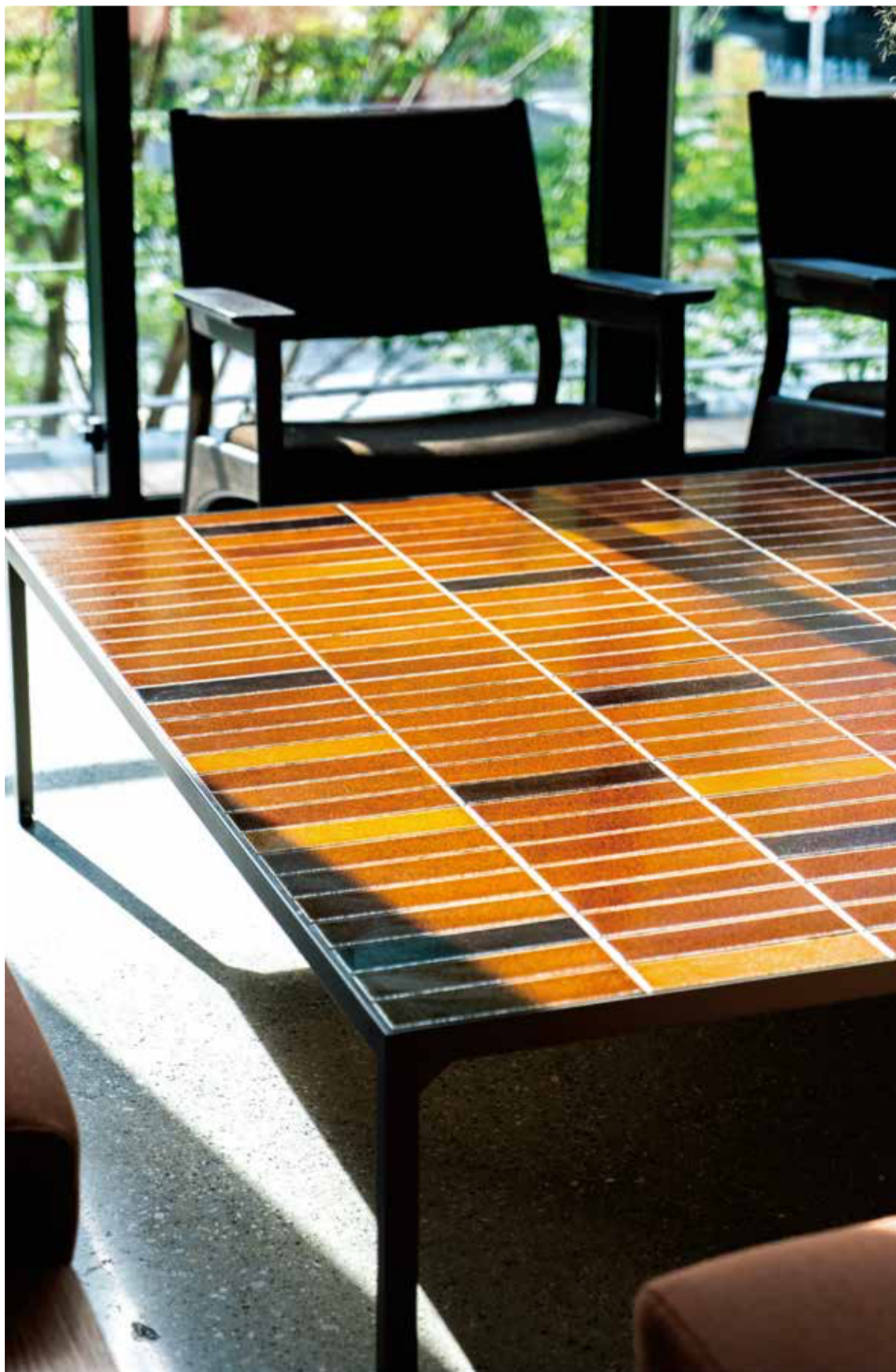
Travel.

貼り巡る旅

Vol.3

東京都、渋谷。

様々な人々が行き交う渋谷駅から代々木公園に向かう上り坂の途中、細い路地を1本入ると、ビルの間間に緩やかな勾配のある公園が現れます。都会の喧騒から少し和らいだ空気が流れるこの公園内に「ブルーボトルコーヒー 渋谷カフェ」があります。ガラス張りの建物は外と中を心地良く繋ぎ、内部には公園の緑と呼吸する様に鮮やかな茶色のタイルが随所に張られています。一見どこにでもある様に見えるタイルですが、近くで見ると繊細な色調のグラデーションや焼き目がついた様な奥行きのある質感を纏っています。この印象的なタイルをデザインに活かし、設計を手掛けた芦沢啓治建築設計事務所の芦沢啓治さんにタイルと空間にまつわるストーリーを伺いました。



このタイルは、デザイナーと共同で建材の開発を行うDzekがオランダのデザインスタジオFormafantasmaと共に3年をかけて開発したものです。シチリア島 エトナ火山の火山灰が釉薬に用いられていることが最大の特徴です。火山灰には金属酸化物の含有があるため、釉薬に混ぜて焼成すると独特の色彩と風合いがでます。とはいえ自然物は扱いが難しく、釉薬バランスなど3年がかりで開発が行われ、2019年のミラノサローネ国際家具見本市で発表されました。以前からDzekのBrent氏と交流があり、ミラノで一見して気に入っていた芦沢さん。Brent氏が来日した際に伝えると、彼の帰国後イタリアから実物が届きます。Dzekの様に建材がクリエイティブに開発されることはとても面白い。でも実際に使われる際はそこまでストーリーを引き継げないなどと感じていた芦沢さん。さりとてデスク横に置いておいたこのタイルはまさに今回のプロジェクトにぴったりのストーリーを持ち合わせていました。

「このプロジェクトは色々な意味で、ものすごくしっくりきたんです」

「ブルーボトルコーヒー 渋谷カフェ」がある場所は、関東ローム層いわゆる富士山の火山灰が堆積して丘になっており元来土っぽさの残る土地柄です。1Fはその土の記憶をタイルに閉じ込める意味も込め、カウンターにふんだんに使用しました。幼い頃に公園でよく目にしたタイル製の低いブリック塀のイメージもどこか重なります。そして1Fと2Fを空間と機能の両方を分断しない様にデザインを考えると、タイルが繋ぎ役となりました。ガラス張りの建物は外から見ても、タイルが視線のポイントとなり空間を緩やかにリンクさせています。タイルの3色ある濃淡は1Fは濃色、2Fのテーブルやステップには中間色、壁面には淡色が配されました。このタイルをどう繋げるかという視点はタイル以外の空間要素にも大きな影響を与えます。例えばソファの生地や素材、このカフェのためにデザインされた家具、さらにブルーボトルコーヒーの柔軟な発想がプラスされ、タイルを模したチーズケーキまでメニューに用意されることになりました。ケーキのお皿は鹿児島島の火山灰や鉱物を調合して食器を作るONE KILN CERAMICSのお皿が使用されるという徹底ぶり。火山灰から焼きもの、建材から食までひとつの空間の中でタイルをきっかけにユニークなアイデアがあちこちにもたらされました。



タイルからインスパイアされこんがり表面を焼いたチーズケーキ。渋谷カフェ限定メニューです。



「一般的にタイルを使用する際は機能的に使用することが多く、デザインのアクセントにはなるけれど、あえて際立つものにはせずあくまで空間に馴染むレベル感に抑えることが多い」という芦沢さん。今回のケースはこれまでにない特別な使い方でした。その結果コミュニケーションにも変化が起こります。このタイルを使ったことで、お店の人が「なるほどこういう調れのあるタイルなんだ、このタイルってチーズケーキっぽいね」とアイディアを巡らせる。そうしてできたチーズケーキの様にまた全く異なったコミュニケーションに繋がっていきます。タイルを通して生まれるコミュニケーションが多方面からたくさんまわりました。それはやがて利用する顧客にも伝わります。「空間として優れたデザインであることはもちろんですが、最終的にこのブランドの人達、お店を実際に使う人達が語りやすいストーリーがあることは大切だと思います」



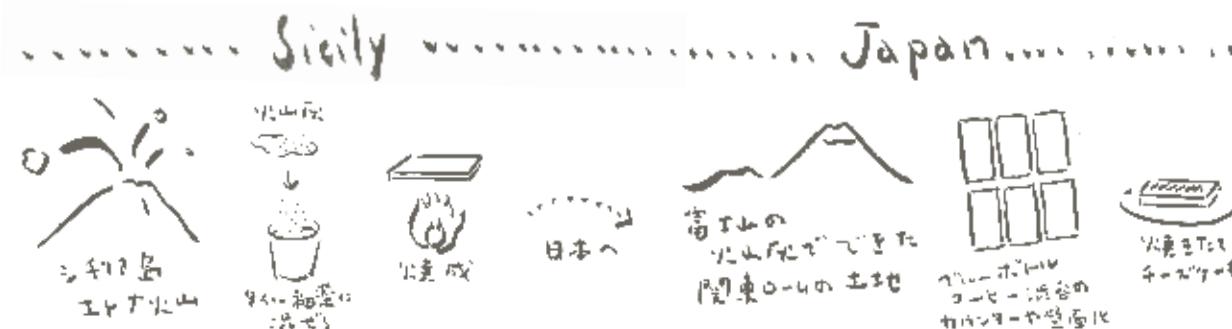
また、ブルーボトルコーヒーは、一つとして同じデザインの店舗がありません。ブルーボトル 渋谷カフェ2Fの座席に注目してみると、視点の高さが異なる座席がたくさん用意されていることに気づきます。どこに座ろうかなと引き立てられる高揚感、そして自分のその日の気分で居場所を決められることはさりげなく良い居心地へと導いてくれます。ブルーボトルコーヒーが大切にしている、来てもらった方にどういう気持ちになってもいいかというホスピタリティがそれぞれの店舗の空気感、空間そのものに隠されています。

「カフェやレストランが良くなると街や都市が豊かになる、良くしているという実感が出てくるんです」と芦沢さんは話してくれました。確かに、近所に良いカフェが一つできると自分の生活がちょっと良くなった気がします。一つ一つの質にこだわってきちんとストックとして残していくと、都市の風景が変わり、街としての価値が高まっていく、それが面白いコミュニケーションに繋がっていく。渋谷の中にあるオアシスは、空間と周辺を繋ぐだけでなくコーヒーとコミュニケーションという人生に大切な安らぎを与えてくれる人々のサードプレイスでした。

芦沢 啓治 Keiji Ashizawa
1996年横浜国立大学建築科学科卒業。2005年に芦沢啓治建築設計事務所設立。カリモク、無印、IKEAなどの家具ブランドとの協業や、Panasonic homes とのパイロット建築プロジェクトなど幅広い分野で活動を行い、国内外の数々の賞を受賞。小さなプロジェクトから建築プロジェクトまで業務は多岐にわたるが、その全てにおいて一貫して「正直なデザイン / Honest Design」を心掛け臨んでいる。

ブルーボトルコーヒー 渋谷カフェ
東京都渋谷区神南1-7-3 渋谷区立北谷公園内
アクセス JR線 渋谷駅より徒歩7分
1F:10席 2F:33席 屋外ベンチ(1.2名が1)12台
営業時間 8:00-22:00

※営業時間は状況により予告なく変更となる場合がございます。詳細はホームページをご確認ください。
<https://store.bluebotlecoffee.jp/>



平田タイル ショールーム

東京 東京都中野区本町1-32-2 1F
Tel 03-6308-1135 Open 10:00-17:00
水曜・日曜・祝日定休

名古屋 愛知県名古屋市中区錦2-20-8 東栄ビル 2F
Tel 052-218-3186 Open 10:00-17:00
水曜・日曜・祝日定休

大阪 大阪府大阪市西区阿波座1-1-10 1・2・3F
Tel 06-6532-2002 Open 10:00-17:00
水曜・日曜・祝日定休

現在ショールームは完全予約制となっております。ホームページまたはお電話にてご希望の日時をご予約ください。営業時間は予告なく変更となる場合がございます。各ショールームまたはホームページよりご確認ください。

tiles タイルのポータルサイトができました!
<https://tiles.hiratatile.co.jp/>

今号の表紙タイル Suui



透き通った青磁の釉薬と丹が重なりあうような形が特徴的なデザインのタイル。焼きもの、瀬戸の工房で一枚ずつ職人の手で作られています。



gia staff
creative director / Editor
Fumukawa Mayuko
Art director / Designer
So Sachi (ummm)
Photographer
Mumoto Yuki
Illustrator
Wakuda Chiharu
marketer
Tanabe Tsuyeda

aiu (あいう) は母音が名前の由来になっている、タイルと焼きものにまつわる背景を紹介する情報ツールです。

[aiu] 発行年月日: 2021年8月1日 第3号発行
制作: aiu編集部 発行元: 株式会社 平田タイル
大阪市西区阿波座1-1-10 06-6532-1284

